第４６回神奈川産婦人科内視鏡研究会

抄録集

【演題 1】
腹腔鏡下子宮全摘術後の卵巣茎捻転に対して腹腔鏡下卵巣茎捻転解除及び卵巣固定術を施行した１例

【所属】
関東労災病院　産婦人科

【演者】
小松　勇史朗

【共同演者】
袖本武男、北村周平、山本高生、中島啓輔、
鈴木瑛梨、栗下岳、石野朝美、香川秀之

【抄録】
【緒言】卵巣茎捻転は産婦人科の緊急手術の約 3%を占める疾患である。その多くは腫瘍性病変が原因であり、腹腔鏡下子宮全摘術後の正常卵巣茎捻転の報告は稀である。
【症例】症例は 35 歳　0 経 0 産、突然発症の右下腹部痛と嘔気を主訴に救急要請された。2016 年に子宮頸癌に対して子宮全摘術の既往があった。婦人科診察では異常所見はなく対症療法で経過観察としたが、症状が持続したため腹部造影 CT 検査施行した。右卵巣静脈の蛇行と卵巣静脈内血栓を認め、右卵巣捻転が疑われたため緊急腹腔鏡手術を施行した。
術中所見では、上記手術のため骨盤腹膜が広範囲で欠損し、両側骨盤漏斗靭帯が露出していた。また右卵巣は骨盤漏斗靭帯部で 180°捻転し暗赤色を呈していた。右卵巣は摘出、左卵巣は今後捻転をきたす可能性を考え 0-0Vicryl Plus で縫合・固定した。術後経過は良好で入院４日目に自宅退院となった。
　症例を提示し、文献的考察を含めて報告する。(377)

Ｍｅｍｏ

……

……

……

……

……

……

……

【演題 2】
子宮動脈塞栓術後子宮鏡下切除術を施行したRPOCの３症例

【所属】
けいゆう病院　産婦人科

【演者】
末永香緒里

【共同演者】
持丸佳之、緒方泰彦、白石哲郎、上山怜、
松尾若奈、阿部靖子、馬場征一、荒瀬透

【抄録】
【緒言】胎盤ポリープは流産後や分娩後の妊娠組織の遺残により発生し時に大出血を引き起こす。遺残胎盤と合わせ Retained products of conception(RPOC)と定義され、子宮温存希望例の治療の一つに子宮動脈塞栓術（UAE）後早期の子宮鏡下切除術（TCR）がある。今回同治療を施行した３症例を経験したので報告する。
【症例】２例は流産手術後、１例は分娩後の症例で、大量出血を主訴に救急受診され入院管理とした。超音波検査で子宮内腔に血流豊富な腫瘤像や子宮筋層から連続する血流をもつ嚢胞をみとめ、MRI 検査で RPOC と診断された。断続的な出血による貧血、凝固異常をみとめ、２例に輸血を施行している。全例子宮温存希望があったため、UAE 後 TCR を施行した。術中、術後の出血は少量だった。病理結果は RPOC だった。
【結論】本疾患は時に大量出血をひきおこし、その後の挙児希望を考慮すると診断や治療には慎重な対応が望まれる。子宮温存希望例には UAE 後 TCR を行うことでより安全に対応できることを再認識した。

Ｍｅｍｏ

……

……

……

……

【演題 ３】

「腹腔鏡下生検が有用であった高異型度漿液性卵巣癌の１例」

【所属】

新百合丘総合病院　産婦人科

【演者】

古明地康平

【共同演者】

有馬宏和,、別宮若菜、高松愛、佐伯直彦、安藤まり、仙道可菜子、中筋貴史、益子尚子、大久保はる奈、奥野さつき、原周一郎、浅井哲、竹本周二、樋口隆幸、田島博人、浅田弘法、鈴木光明、落合和徳、吉村泰典

【抄録】

【緒言】高異型度漿液性卵巣癌は初期症状に乏しいため多くが進行癌として発見されるが，化学療法感受性が高く早期の診断と化学療法導入が望まれる. 今回我々は２度の腹水細胞診が陰性となり, 腹腔鏡下生検で高異型度漿液性卵巣癌と診断した１例を経験したので報告する.

【症例】80 代　０妊０産 下腿浮腫･腹部膨満感･貧血を認め, 当院内科紹介となった. 造影 CT で多量腹水と骨盤内に散発する腫瘤影を認めた．上下部消化管内視鏡検査で異常なく, 腹水細胞診は陰性であった. 腹膜癌･卵巣癌疑いで当科紹介され, ダグラス窩腹水穿刺施行するも陰性で, 診断目的に腹腔鏡下手術を行い高異型度漿液性卵巣癌と診断した. 術前化学療法(TC 療法)を３クール施行し, 治療効果は腫瘍の縮小・腹水の減少を認め PR で今後腫瘍減量術・術後化学療法を行う予定である.

【考察および結論】進行卵巣癌では腹水貯留を認めること多いが, 腹水細胞診陽性率は 60%程度とされる. 診断目的の腹腔鏡下手術は早期の化学療法導入が可能であり有用であると考えられた.

Ｍｅｍｏ

……
……
……
……
……
……